

ずいそう

ケガの功名，摩天楼へ

瀧本 順治



子どもの頃に図鑑やテレビで見たニューヨーク摩天楼，とりわけ「エンパイアステートビル」を訪れるのが長年の夢であったが，特に焦る理由もないので定年退職後にゆっくり行ければいいと思っていた。

転機が訪れたのは44歳。テニスの練習中に右アキレス腱が断裂し，完治まで4カ月以上を要した。このとき実感したのが，定年どころか明日さえ無事に迎えられる保証など無いということ。以降，「やりたいことは今のうちに」と考えるようになった。早速翌年の晩夏，家族の理解も得てニューヨークひとり旅を執行。せっかくなので第二の夢，ワシントンD.C.のスミソニアン博物館なども訪れることにした。

初日は成田空港からニューヨーク JFK 国際空港へ飛び，国内線に乗り換えワシントンD.C.のロナルド・レーガン・ワシントン国際空港に到着。空港からはワシントン地下鉄（写真—1）で市内へ向かった。

ホテルに荷物を預け，まずホワイトハウスや国会議事堂などを見学。テレビや映画でよく見るアメリカを実感したのち，念願のスミソニアン博物館を訪れた。スミソニアン博物館とはスミソニアン協会が運営する多数の博物館や研究施設の総称で，その多くがワシントンD.C.の中心部にある。連邦政府からの運営資金により，博物館は厳重なセキュリティチェックがあるのみで入館料無料となっている。すばらしい。

スミソニアンには映画『ナイトミュージアム2』の舞台となった自然史博物館や歴史博物館，美術館など多様な施設があるが，私のお目当ては何といっても航

空宇宙博物館。ここには退役した世界中の航空機やアポロ宇宙船，月着陸船などの実物が展示されている。

夢のスミソニアンで浮かれていた私はここで大失敗を犯す。デジカメの操作を間違え，出国してから撮り貯めていた写真を全部消去してしまったのである。今思うと，落ち着いてすぐにSDカードを取り出し，どこかで新しいメディアを購入して撮影を続ければ後日容易にデータ復旧できたはずなのだが，当時は慌てて脳ミソが完全に思考停止となり，スマホで「デジカメデータ消去 復旧」と検索することさえ思い至らず，放心状態で画像データを上書きして取り返しつかなくしてしまった。夢の場所での悪夢であった。

スミソニアンの航空宇宙博物館はワシントンD.C.中心部のほか，郊外のワシントン・ダラス国際空港近くに「スティーブン・F・ウッドバー・ハジー・センター」という巨大な別館がある。翌日，地下鉄とバスを乗り継ぎ，遠路こちらにも訪問した。ここでは建物内にスペースシャトル（写真—2）やコンコルド，ロッキード「SR-71 ブラックバード」偵察機などの実物が大量に展示され壮観であったが，広島に原爆を投下した「B-29 エノラ・ゲイ」が旧日本軍の「紫電改」などと並んでいたのには少々切ない気持ちとなった。

ワシントンD.C.からニューヨークへはアムトラックの高速鉄道「アセラ・エクスプレス」（写真—3）を利用した。ワシントン・ユニオン駅からニューヨーク・ペンシルバニア駅まで最高速度200km/h強で約3時間，なかなか快適な乗り心地であった。前の座席



写真—1 ワシントンD.C.の地下鉄



写真—2 スペースシャトル「ディスカバリー」



写真—3 アセラ・エクスプレス



写真—4 エンパイアステートビル (パネル写真)

ポケットには飛行機とよく似た緊急脱出の図解マニュアルが備え付けられており、日本の鉄道との危機管理の考え方に差を感じた。

ニューヨーク到着後、摩天楼を横目に湾内クルーズで船上から「自由の女神」を見学し、夜はブロードウェイでミュージカル鑑賞。翌日はニューヨーク・ヤンキースのデーゲーム観戦（残念ながら当時の田中投手は登板せず）、夜のメトロポリタン美術館観覧など、超定番観光スポットを巡ったさらに翌日、私にとってメインイベントであるエンパイアステートビルに向かうこととした。

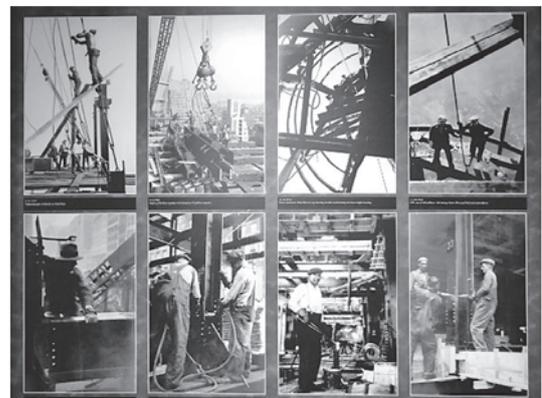
市内の移動には地下鉄のフリー乗車券を活用した。個人的に感じた地下駅の第一印象は、「昭和50年代の東京、営団地下鉄銀座線・外苑前駅を陰気にしたような雰囲気」であった。日本の鉄道は道路と同じく左側通行だがニューヨーク地下鉄は右側通行なので、思わず逆方向に乗りそうになることがよくあった。

タイムズスクエアなど繁華街が近い駅ではやたらとストリートミュージシャンが出没し、エレキギターやドラムセットまで持ち込んで演奏する人達もいた。表現の自由とはいえ、天井が低い地下駅コンコース内の大音量には閉口した。また、どこから入場したのか、地下ホームではホームレスがコップを片手に、列車を待っている旅客に次々と近づいて来る時もあった。寄付したくなければ黙って首を横に振れば大丈夫。しかし、特に夜間の地下鉄は少々不気味で、なるべく人が多い場所を選んで列車を待つよう心掛けた。

ニューヨークひとり旅も終盤、ホテルの最寄りから地下鉄を乗り継ぎ、夢のエンパイアステートビルに到着した（写真—4）。このビルは1929年3月に着工され、2年後の1931年（昭和6年）4月に竣工。先端部の高さは443mあり、1972年にワールドトレードセンター（WTC）北館が竣工するまでの約40年間、世界一高いビルであった。建設の様子を伝えるパネル写

真では、帽子とジーンズの作業員が鉄骨の上で命綱も付けずに微笑んでいた（写真—5）。90年も前に400m級のビルが2年で建設されたとは驚異的である。

展望フロアの上階は屋外展望台となっており、晴天のニューヨーク上空には心地よい風が吹いていた。40年来の夢がかない素直に感動した。貯めていた小遣いは使い果たしたが、来て良かったと心底思った。エンパイアステートビルを堪能したあとは、慰霊を兼ね、WTC跡地と9.11記念館を訪れた（写真—6）。



写真—5 建設の様子 (パネル写真)



写真—6 9.11 記念館 (折れ曲がった WTC 支柱)

帰国して少し経つと、新型コロナウイルス騒ぎで海外旅行どころではなくなった。あのときアキレス腱を切っていなければ、恐らくまだニューヨークには行っていない。まさに怪我の功名だと思った。

ようやくかつての日常が戻りつつある。感染防止に気を付けながら、さて、次はどこへ行こう。

——たきもと じゅんじ (独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構
機械課 括課長補佐——

